

ピスマルクと伊太利戦役前後

長, 壽吉

<https://doi.org/10.15017/2340959>

出版情報 : 史淵. 19, pp.1-22, 1938-12-10. 九州帝国大学法文学部
バージョン :
権利関係 :

ビスマルクと伊太利戰役前後

長

壽

吉

「奥太利と同盟國佛蘭西を有つ伊太利との間に、戰爭が起つた際、ビスマルクは聖ペテルスブルクの使節に任せられた。世人はこの事のうちに、忌避の一面が存在するのを見んと欲し、その忌避が、フランクフォール議會にて、恒にヴィエンスの政府に向つて、反抗の態度を持してゐたビスマルクてふ人物を、遠ざける目的のものであるとした。然し、この意見は大に疑はしいと思ふ。實はさうでなく却つて、當時將に來らんとする出來事、即ち普奥の間の争を豫期しつゝ、この任命に由つて普露西と露西亞との親善關係の素地を、能く用意しようとするのが、計られてゐたのである。かく考へる方が、頗る真相に近い。何となれば、フランクフォール議會に於てビスマルクが席を同じくしたゴルチヤコフ、即ちビスマルク任命の時には宰相となつてゐたそのゴルチヤコフとは、ビスマルクは親しく交遊したのであり、ビスマルクは親露西亞の目的を常に懷いてゐることを以て、周知された人であるからである。然し、奥太利は充分能く、この内情を窺ひ知つてゐた。故にビスマルク自身がその手簡のうちに記してゐる通り、奥太利はベルリンに於て切りに、聖ペテルスブルクからビスマルクを呼戻

すことを、劃策した。これに由つてもビスマルク任命の内情が察せられるのである。」(コーエン『獨逸帝國に就ての諸論。』頁四五(1))

斯う云ふ觀方は、或は一面妥當であるかも知れない。然し論者がこれを書いた年、一八七九年に於ける、ビスマルク政策に對する一種の怨怖と猜疑とは、斯う云ふ餘りに穿ち過ぎた觀方、或は現狀に支配された觀察の偏傾から生ずる不徹底な、換言せば、現實的な方面ばかりを觀て、その奥に在るものを觀ないこと、即ち、今日の吾々が遠く隔つて考へうる如き、地位に存してゐないことから生ずる、已むを得ざる不徹底な、觀方であるとも謂ひ得やう。

聖ペテルスブルグ使節が、彼に對する忌避の一面をもつてゐたことは、所謂「悲慘なる追放の如き運命」(ベンヴィル『ビスマルク傳』頁三二(2))であつたこと、並びに彼のアルニム夫人宛の書簡、(一八五九年六月二十九日、『ビスマルク政治文通鈔』頁一〇四、一〇五(3)所載)(拙稿「ビスマルクの岐路と運命」昭和十二年三月刊『東淵』頁一八參照)に於て想像するに困難でない。フランクフルト議會に於て彼が表示するを恒とした「反感」と、彼れの佛蘭西接近の意見とに對してゲルラハがこれを形容して、ビスマルクが「正義と革命とに向つて熟慮を失つた」としたこと、(『ゲルラハ書簡集』頁二二九(4)(同上拙稿頁一六參照)、またベルリン宮廷の意向にも照して見る時は、等しくこの忌避の一面の存在が了解されやう。

然しそれは、その一面として見て置くだけで、或は前説コーエンの意見のやうなものが伏在したかも

知られないが、これらは先づフランクフルト議會に於けるビスマルクの言論の、精細な検討に始まつてその反響殊にベルリン宮廷に於けるもの、更にゴルチャコフとの交游の狀況、その他數々のものゝ上の文献から推定され得る事である。只こゝにはこの全體を考へながら、「忌避」と「用意」との間に、吾々がビスマルク自身の上に何を見得るかを知り度いと思ふ。

元來ビスマルクに關しては、さかくその現實主義的な行實の傾向が、凡てに多過ぎるほどに注目される。彼の特色も偉大さも、常にこの上に集中して考へられる。私も今までビスマルクに關する四五の論文に於て、この傾向の注目に支配されてゐた。恰かもナポレオン三世に就いて、その「夢想」を餘り多きく着目したと等しい。實際にはこれらは興趣がある。然し、元來ユンカアの浪漫的な傾向を認めながら、その遺影をビスマルクのうちに求めようとするのは、欠陥であつた。吾等が瞬時片鱗なりともこれを探し求むることが出来るか、或はこれに對する何等かの系線の一端を摸索し得るならば、幸であるを考へる。

畢竟十九世紀史のこの顯著な人格が、徹底その特異の傾向に於てのみ觀察されることは、亂麻をたち過ぎて、結局世紀の全容の觀察を過るに至ることが、懸念されるのである。理想家としてのビスマルクを、豫想に従つて少許幾分なりとも摸索し來る時、彼の晩年の「フリードリヒスルウの哲人」の意義が彼のユンカア青年時から現世紀の諸事象に亘つて、よく延長し、よく關聯して、歴史發展のうちにその適宜の地位を見出しうるであらう。

「それは一の寫字機の事に過ぎなかつた。何等自由なる意志意見といふものを、残してゐなかつた。ビスマルクは今や彼の注意を、外國の事態の方へ向けた。そして、その事態は正に注意に價するものであつた。諸事件は今や伊太利の上に崛起しつゝあつた。」(マテル『ビスマルクとその時代』卷

第一、頁四六二(5))

この寫字機に類する仕事は、ビスマルクの露西亞に於ける使節の仕事である。非常に優れたるこのビスマルク傳の著者の言は、吾等に少からざる示唆を與へる。

大方のこの時代の獨逸史は、獨逸史家に由つても、更にこの獨逸史家の影響をうける吾々に於ても、一八六六年以前のビスマルクに就いては、恒に小獨逸論又は「反感」を、その政治生涯の前後に就いて貫流する一の指導的な思想として觀察されるが、これはかく觀察される嫌があるを謂ふことも出来、また謂ふ方が適當であるを見て差支ない。降つて七〇年前後に就ては、同様に、對佛蘭西または「排佛蘭西」を、觀察する嫌がある。これは多くの例を擧げ得ることである。今こゝに私が「寫字機」と云ふものに示唆されつゝ、伊太利戰役の前後の形勢がビスマルクの上に何を與へたかを、前述の如き彼の思想の動向に沿ふて、摸索しようとするに當つても、まづ「史的研究」第二〇八編、フリードリヒ・バイハ『ビスマルクと伊太利。一八六六年戰役前史に關する一寄與』(6)の如き論文中、卷頭忽ち二三頁にして、論者は果して、「反感」または「排佛蘭西」がビスマルク本來原始の思想であると云ふことに、恒に誘導され、或は支配されつゝ、こかく白紙、無底意、または「寫字機」、更にまた時勢思想に圍まれ

つゝ、生々躍動し、推移し、變轉する人間ビスマルクを見ずして、若く、希望多く、想像構圖多かるべかりしビスマルクを、一の定められたる形態の偶像のうちに鑄出せんとする傾向が、顯著に認められるのである。

聖ペテルスブルグに於けるビスマルクの生涯が、決して快適のものでなく、殊に政治的な重要性を有つものでなかつたことは、彼自身の覺書きの不満な叙述に就いて窺はれる。彼れの意見がベルリン宮廷に於て、恐らく何等の反省をも生ずることなくして、徒らに放置されるに等しかつたことは、彼が能く記すところである。(ビスマルク『思慮と追憶』。第一卷頁二二七—二二九(7))。又彼が五九年三月二十九日、聖ペテルスブルグ到着を報じた手簡にある、「九柱戲のうちに入つた犬の如く」と、特に外國語を以つて記したる使節館に出席することの形容の意味も、更に閑散無爲の生活を表示したるものも考へられるところの、同五九年四月四日手簡の、

「凡ての公職上の事態は、これをフランクフルトに比すれば、正に荆棘から薔薇となつたやうだ。然し薔薇がいつまで咲きつゞけるだらうか。それは勿論確でない。聯邦悪意と議長害毒(註。聯邦議會に於ける各邦間の嫉視と、聯邦議會に於ける首席の奪合ひ、これら皆ビスマルクの經驗せしところ)は、こゝで眺むれば、恰かも兒戯に等しい」(『彼の許嫁と夫人とに宛てたるビスマルク公書簡集』頁三六七及三六九(8))

これも亦、等しくビスマルクの政治生涯の一轉向、また一頓挫、更に決してそれは前述コーエンの説

く如き意義のものでなかつたことが窺はれる。

これを奥太利の側に立ちて見れば、所謂用意が充分に推定される。若しこの用意にあらずとするも、所謂自由主義に對する正統の維持に就いて懸念すべきものを、「反感」とともに有したるビスマルクの親佛蘭西的態度に於て、容易に見出しうるものであつたから、このことは關聯するところ、即ち「忌避」となり得るのである。畢竟は「忌避」も「用意」も、實は關聯して一にビスマルクの聖ペテルスブルグ赴任の上に、集中されてゐたのである。その孰れに在るかの検討よりは、吾々にとりては、荆棘を去つて薔薇に入つた政治生涯の一轉機、そして九柱戲上の一犬として、寫字機に類する地位から、意見あり意思ある地位に進まんとする眼前の、伊太利戰役が、その性質の何に於て、猶未だ政治生涯の初期のビスマルクに影響し、三十餘歳の彼の思想の上に、彼の一生の觀察に考量すべき印象を遺したかを見る。ことが、重要である。

このために先づ、前記拙稿「ビスマルクの岐路と運命」に採用したる、ビスマルク宛てゲルラハ書簡一八六〇年五月一日付、サンスウシ發のものを、再びこゝに掲記することとする。曰く、（註レオボルド・フォン・ゲルラハ。一八四九年侍從武官長に任ぜられ、サンスウシ宮に伺候す。國王フリードリヒ・ウイルヘルム四世に信頼されたる、保守思想の人にして、正統主義を奥太利親和の上にもつ人。その覺書及文通は、有益なる史料である。）

「余をして最も悲ましめたものは、貴君が奥太利に對する反感から、正義と革命とに向つて熟慮を失

つたことである。貴君には、佛蘭西及びビエモントとの同盟が、一の可能を考へられる。然しこの可能は、余にとりては全く問題外のこと、願はくは貴君にも同様であるべきものである。即ち何故なれば、ルイ・ナポレオンはその伯父にも勝りて、革命の化身であり、カヴールはライン同盟を主張すること、例せばモンゲラス（ルドウイヒ・フォン・モンゲラス、即ちハノオフエル駐在バイエルン使節）と、主義を等しくするからである。神聖同盟の根本義は、貴君も否認し得ざる又否認すべからざるものにして、神に責務ある處に由つて、諸君主が神の命に従ふ臣屬として、政治すべきを決定し、何等空想にもあらず、又無實用的にもあらず。舊時ナポレオン一世と結びたるもの、何人が災害をうけずして終つたものありや。西班牙の如き、トスカナの如き、一七九四年來の我國の如き、一八〇九年來の埃太利の如き、その他之である。若し獨逸に於て、何國かが佛蘭西及びボナパルトと分離し、神聖同盟に忠實なるものあらば、名譽と叡智とを有ち得べし。——（佛蘭西の排斥すべき事。埃太利と親和し、人はまづ「獨逸」を考ふべき事。ヘツセンその他の運動を非難すべき事。等を述べたる後）——「蓋し所謂「國民國家」は、行爲に由つて成るものにして、斷じて自由主義思想によりて成るものにあらず。云々」

この書簡に於て、ゲルラハがビスマルクに向つて、「政治的書簡」を送ると稱して、忠言としたものは、ビスマルクが正義と革命とを同一視するの誤れる事、佛蘭西及びビエモントとの同盟の可能を信ずることの謬れる事、正統的思想の尊重すべき事、ボナパルト主義の排斥すべきものなる事、まづ「獨逸」

を正視せよといふ事、そして、自由主義思想に由つて國民國家の成立を期するの誤れる事である。

決して渝ることなき信念の下に、正統主義を維持し、眞面目に國家の理想を持して、何等躊躇するところなく、率直に批判し、論斷するを常としたる將軍ゲルラハ（オトカア・ロレンツ『十九世紀の政治家及び歴史家』頁一五七。「レオポルド・フォン・ゲルラハ。その備忘録の第一編」の項。(9)）が、斯くの如き所謂政治的書簡の忠告を記したことは、意外に重要に、當時のビスマルクの思想、即ちそれは決して彼の『思慮と追憶』に於ては窺ひ知り得ざるものであり、その書簡或は演説の如き公表の文書（『ビスマルク全集』その他）には、見出し難きものを、これら備忘録書翰演説等に於ける斷片的言明を綜合し、更に諸著者の論説を併せて、想定するの目的を達する上に、有力なる指導となるものである。まして所謂「美化」されたる、當時のビスマルクに就ての叙述、例へば、『カウール及びビスマルク』（ウルリヒ・ハツセル著、小冊子、一九頁。カイゼルウイエルヘルム・インステイトウト講演(10)）の著者が、ビスマルクの親佛蘭西策に就いて、これを「目的に向つての手段に過ぎず」と斷じ、或は、『一八五一年乃至一八五九年に於ける、ビスマルクの對奧太利抗爭』（アーノルド・オスカア・マイヤ著頁四二五(11)）に「この切札を佛蘭西と稱す」と言ふが如きものに、極めて簡單に取扱はれてゐることでは、終れりとし得ないものである。

一八五九年の伊太利戰役は、普露西に於ける黨派の關係の上に、或る甚だ著しき推移を、招來したのである。これに就いては、當時の大部分の人々は、何等充分な知識を得てゐなかつたが、更に今日

に在りても、これに關する歴史の叙述には、猶區々の状態を以つて、不明確に了解されてゐるのである。(中略) ヴイラフランカ和約の直後 能く人に知られた小冊子、『プロイセンとヴイラフランカ和約』が公にされた。これに對しゲルラハ將軍は、『クロイツ新聞』に四五の有益なる意見を發表した。彼の批判を見るに、彼は、「同小冊子は奧太利を以つて、全く過れる豫想の下に開戦し、且また等しく輕卒に休戦したものであると見るが、しかも、何程かの積極的な彈劾に對して、普露西も亦その責めを明らかにせねばならぬ。然るに普露西は、一の憐れむべき非自立的な凡庸、中間的な躰度に止まる。」と言ひ、斯くの如きは、「新時期」の到來に際し、ピエモンツの意見、或はむしろナポレオンのそれが、攝政王子の周圍に、その政策を過らしむるものあるに由るのである、と考へた。云々(ロレンツ前掲同書。頁一八九・一九〇(12))

この著者の言ふやうに、伊太利戰役に際しての普露西の事態は、その聯邦との關係及び奧太利との關係に於て、複雑にして不明瞭なること甚しきものあり、そして今こゝに有する課題、即ちピスマルクの意見に關して、最も重要な想定の機となることである。果してピスマルクが、所謂「手段」或は所謂「切り札」の上のみ立つてゐたか否か。將た斯く見るところのそれが、單なる溯時的論斷に類し、一層に他の私の所謂當時の人間ピスマルクを、模索すべきものあるか否か。ゲルラハが難詰する普露西の責任の範圍にある、ピエモンツ的ナポレオンの意見が、「新時代」の到來の氣圍のうちに搖動する間に、ピスマルクは何を考へつゝあつたか等々。吾々の考究すべきものは意外に多く、且頗る興味あるも

のであることが考へられる。

アーノルド・マイヤは前掲同書のうちに、ビスマルクはゲルラハに對し、埃太利が到底普露西の盟友となり得ないこと、又ならうと欲しないことを、事態の數學的論理の歸結であること告げたが、之に關して佛蘭西との交渉に於て、普露西が骨牌戲の鍵たる地位にあつて、ナポレオン三世が普露西接近を喜ぶことを知り、しかも、國王とゲルラハとが反對すること明なる故に、ビスマルクは言明をさけたが、彼は少くも普露西佛蘭西同盟の可能を、世間に知らしめ置くだけでも、効果があるとした。そしてビスマルクは、聯邦諸小邦が聯邦關係を以つてそれ自身を守護すること不可能なるを知る時は、必ずや佛蘭西に味方するものであると考へてゐた。と述べてゐる。(マイヤ前掲同書頁三〇九(13))

この數學的論理の歸結の書簡は、一八五六年四月二十八日のことである。果してこの當時に於て、このやうにビスマルクが條理整然たる政略、及びその豫想、ことにその技術に長じてゐたか否かは、少くとも吾々の疑を容れるに足るところである。若しもこれほどの才幹の片影が、明瞭に認められ、且この政略の意の存するところ、既に明かであつたならば、聯邦議會に於て存したる彼に對する自由主義者としての非難は、夙に一八五九年に於ては消滅して、所謂忌避の一面の存在を幾分に不可能ならしむるものが、あつたであらう。この自由主義者としての非難は、「クロイツ新聞記事事件」、則ちナポレオン結婚の誹謗に關する諸意見の賛否の間にあつて、ビスマルクが反對を表明したること、(一八五三年一月二十七日ゲルラハ宛書簡。『ビスマルク全集』卷第一書簡集。頁二八五)及び、佛蘭西との抗爭を無

益なりとしたこと、（一八五三年一月二十八日、ゲルラハ宛書簡。『ビスマルク全集』巻第一、頁二八六（14））（拙稿「ビスマルクの岐路と運命」。史淵第十五輯頁二二載録）に窺はれるものであり、更に彼がクロイツ新聞記事を非難してゲルラハに送れる前記書簡、（一八五三年一月二十七日）（『ビスマルク全集』同前。『ビスマルク・ゲルラハ文通』。頁六三（15））に由つても、窺はれるものであつた。

「若し吾等が、佛蘭西風に帆をあげまじとするならば、然らば吾等は、少くも公然と船を焼くやうな反對の側からの鐵面皮に、必要なる要領をもたねばならぬ。余は昨日マントイフェルに書を送つて、官營新聞紙上に於て、ルイ・ナポレオンが自由勝手に結婚し得ると、書かせることを請ふて置いた。若しルイ・ナポレオンが、歐洲諸君主の間に同格となるならば、又ともかくも諸君主の友人たる位置に立ち得るに至らば、今日の總ての佛蘭西家政上に關する傳染病は、むしろ速に終熄するに至るであらう。」

一八五五年に於て、彼はマントイフェル宛の書簡のうちに、聯邦議會に於ける奧太利派の迂愚を笑つた。フォン・トロットの態度を嘲笑し、その自由主義表明を述べて、極めて痛烈に、然し稍野卑に類する評語を用ひてゐた。

「情鈍な、無能な、そして無良きな輩だ。見かけは好人物だが、然し正に、虚偽ばかりだ。こう云ふ人物には、何人も信を置かない。」「議長のカイド（マホメットの従僕に喩へて）たちは、唯々奧太利の利益のみを圖るから禍を生ずる。これらの輩は、正に普露西の奧太利政府との關係を、妨害するも

のである」(後節意譯)(一八五五年四月十八日書簡、『ビスマルク全集』卷第二政治書簡集。頁四四(16))

この書簡が、マントイフェル宛のものであつたからでもあらうが、——ゲルラハはマントイフェルを、「ボナパルト的にして獨裁的」と評した。そして、露西亞及び佛蘭西を背景とするマントイフェル憲法を非難し、「余は屢々大なる憂懼と痛心とを、彼れに就いてもつ」として、ボナパルト主義てふものを非難した。(『ゲルラハ書簡集』一八五二年十一月十三日及一八五三年一月二十八日、頁二九及び頁三四(17))——フォン・トロット等の所謂民主主義者なりと自稱する、その自由思想そのものの禍害については、何ごとも述べてゐない。禍害は一に、親墺太利説の如何に存するのである。殊にこの書簡に就いて注意されることは、「普露西の墺太利政府との關係」といふものが、フォン・トロット輩に出つて、「徒らに」妨害されることを惜しむと云ふが如き意が、この一八五五年四月、即ち外はクリム戰役の終内は關稅同盟と墺太利との合體の問題の頃に於て、微かに窺ひうるものあることである。自由主義必しも論難せず、又對墺太利意見にもなほ一聞隙ありと見るならば、ビスマルクの當時の思想は、測り難き一傾向、それは何が故に彼がシエクスピヤを喜び、バイロンを誦したかの一傾向に、近づくものあることが察せられる。生々躍動し推移し變轉する人間ビスマルクの、想像多く構圖多かりし美しさが、こゝに觀られなければならぬ。それは決して一定の形態の偶像のうちに、鑄出されるべきものではない。

「さてビスマルクの政策よ。色々の穏和な言ひ廻しも何の効なく、それがボナパルト同盟の上に現出

してしまつた。それで墺太利と獨逸諸侯とを、脅かさうと謂ふのである。——この國民素因といふのは、君侯無き國民との同盟を指して意味するのだ。——何と云ふ同じ陣營中の軋轢であらう。」ゲルラハはその備忘録のうち、一八六〇年に於て、斯く記してゐた。そして尙その上に、

「然し、ビスマルクをそのまま放つて置かう。とにかく、憐れむべき状態で、しかも頗る不健全な者だ。さて何たる混亂のうちに、吾等が今在るのか。佛蘭西と、そして墺太利と、また露西亞とは緊張した關係に立ち、獨逸諸侯とは敵對の形である。その上國內では、混亂した脆弱な政府があるのだ。」
(ロレンツ前掲同書頁一九一所載(18))

さきに述べたるマイヤの所説とは異つて、一八六〇年に於てもビスマルクは、猶その親佛蘭西策を充分に明らかにしてゐたのである。そしてゲルラハをして、同じ陣營に於ける軋轢を嘆ぜしめ、且つ又放置する外無き程度に於て、信頼を棄てしめるものがあつたのである。如何にしてこの事態から、間も無くビスマルクが新政府の人となつたかに就いては、實にロレンツが言ふ如く、史上の謎がある。未曾で明らかにされたること無き、史上の不可解が存在する(ロレンツ前掲同書頁一九二(19))。唯こゝには、この當時に於て、所謂同じ陣營の軋轢と稱せられるもの、從て上述の如きゲルラハ將軍の慨嘆となつたものは、神聖同盟と言ひ、正統主義保守主義と言ひ、自由主義國民主義と言ひ、或はボナバルト主義と言ふものゝ上に、兩者の了解見期待等が、甚しく齟齬したことこの「混亂」に由るもの、甚多きことが考へられ、更に、所謂混亂は、こゝにも亦ビスマルクの上に、見出しうるにあらざるかが考へられる。

何ごこに由つて所謂「自由主義者」が、ビスマルクの上に加へられたか。聯邦議會に於ける彼の「反感」は、彼の元來のそして依然たる、保守主義を否定するに足らない。彼が一八五〇年十二月三日議會に於ける演説に、

「ウニオン徒黨には力強き手が、そのウニオン外套の最後の裂片をも引き裂くに至るべきこと。而して頗る輕薄なる衣裝には、唯その赤き裏衣を見る外には、何ものも残るまじきこと。」（『ビルマルク全集』卷第十、頁一〇九(20)）

と謂ひ、更にこれに先だち、同年四月十五日エアフルト議會、即ちウニオン議會と稱するものに於て演説して、

「この議會の開設に當り、余をして苦悶せしめ、又今猶苦悶しつゝあらしめる感慨は、獨逸帝國が未曾で有したることなき旗色を以て、蓋はれることである。この旗色は、實に過去二個年以來、擾亂とバリカアドとを以て成るものである。」（『ビスマルク演説集』卷第一、頁一八〇(21)）

と謂ふものにも窺はれる。しかもこの意は、ゲルラハの所謂ボナパルト主義、マントイフェルをさへも斯く呼ぶそれが、意味するものは、敢て抵觸せずして、ビスマルクに存在するのである。

自由主義を非難する彼は、ゲルラハその他の考へる如き意に於て、ボナパルト主義でふものを見てゐない。ウニオン計畫が、ヘツセンその他の民主主義者に由つて考へられる限り、彼はこれを非難するが獨逸の國民的統一に就ては、彼はその理想を懐いてゐる。彼が聯邦議會の閑暇を利用して巴里に至り、ル

イ・ナポレオンと會して、ナポレオンが獨逸の國民統一の氣運に同情あるを見るや、「ナポレオンの心は、その頭より好きこと」(チエスタ・クラアク『フランツ・ヨゼフとビスマルク一八六六年戰役前の奧太利の外交』頁一二五(22))を知つてゐた。そしてゲルラハに向つて、ルイ・ナポレオンを革命の代表と見ることの過誤を言明した(『思慮と追憶』卷第一、頁一七五(23))。彼が巴里に於て「獨逸のカザール」と稱せられたことも、故なきものではない。彼の一八五二年來五九年伊太利戰役時前後に亘る親佛蘭西の思想に就いては、これを一八六六年の普露西伊太利の同盟と同一の型に於て、適時的觀察の下に置く可きものでもなく、又單に「反感」の餘勢とのみ觀る可きものでもない。「セーヌ河畔のスフィンクス」と彼れとの間には、第二帝政の旗色たる國民主義がある。しかもそれは、ビスマルクに於ては、普露西宮廷の人々の「忌避」の一端に考へたる如きものではなくして、保守主義的浪漫主義者等が理想としたるに似たゲルマニスムスの、政治的形態である。

一八五一年六月二十九日、彼れがフランクフルトからマントイフェル首相に送つた私信には、彼れの獨逸統一形態に關する希望を見る上に、頗る重要な言明がある。そのうちには彼れは記して曰く、
「この聯邦議會に於ては、惜しい哉何等の期待もあり得ない。——獨逸の政治の或る有機的な發達の上に於ては、この議會はこれを達成する能力なく、唯各邦間の個々區々の協約に止まる。實にこれが吾等に、自然に由つて指示されたる、地理的領域の内側に於てである。——總ての獨逸諸政府の共通なる利益の正當なる尊重、及び、これに伴ふところの必要なる決定、並びに相互の秩序維持は、こゝ

には少しも存在しない。』(『ビスマルク全集』卷第一、頁一七(24))

斯くの如きは簡單に、「血と鐵」との途に向ふの意であるとは解し得られない。彼がその後、一八五三年十一月二十五日、フランクフルトからゲルラハに送つた長文の書簡(『ビスマルクとゲルラハとの文通』頁一一七—一二二(25))にも、繰返して全獨逸の融合を説いたことなどを見れば、誠にアーノルド・マイヤの言ふ如く、彼はあらゆる善意を以て、墺太利との協調を留意したもの、従つて聯邦議會の狀態が、彼れのこの希願に對して無効なるを慨嘆するの意は、前掲の一文に於て、充分に看取されねばならぬところである。

聯邦議會に於ける自由主義的國民主義的論者は、前者を通じて露西亞を排斥し、後者に於て對抗的に佛蘭西に遠かつて従つて墺太利に近づき、遂にビスマルクをしてこれを誹謗せしむるに至つたが、この論者の上に於て普露西宮廷人は、少くも「正統主義」を見てゐた。然るに、ビスマルクに於ては、自由主義が排斥されることに、彼れが嘗て佛蘭西の正統主義を稱して「騙惑する魔法の語形」(『思慮と追憶』卷第一、頁一五六(26))と言つた如くに、この正統主義が考へられてゐたのである。彼れがこの騙惑の正統主義説を排斥したとは謂へ、この國民主義、即ち少くも彼れもまたその高潮時の環境に在つたものに對しては、相應の興奮を有してゐたことは、想像に難くないところである。しかも猶更に、彼のこの國民主義的興奮は、むしろ中古の獨逸帝國を回想しつゝ、浪漫的にその再興を夢みるが如きゲルマニスムスに屬してゐたものと考へられる。彼れがユンカアの傳統を有するが故に、そして彼れがシェーン

ハウゼンの古き家系を有するが故に、かゝる歴史的理想を、その政治生涯の初期に懐くことのあるべきを考ふるは、決して全く理由なき想定ではないと思はれる。

彼れのこのゲルマニスムスは、獨逸再建の政治の形態のうちに、墺太利を抱擁し得るものであつた。

そこには大獨逸説もなければ、小獨逸説もあり得ない。ゲルマン族の獨逸、嘗てありし日の神聖羅馬帝國があるのみである。「墺太利除外」の基調もなかつたとは謂へ、これも敢て妨げざる萌芽も存在してゐたのである。「排佛蘭西」の根元もなかつたとは謂へ、能くこれに傾向し得る發展も存在してゐたのである。ビスマルクが聯邦議會のその「反感」を通じて自由主義の非難をうけたるもの、即ち親佛蘭西説を以つてボナパルト主義とし、ボナパルト主義を以つて革命主義として、普露西宮廷の人々が響登したるもの、そして「忌避」の一面となつたものは、ビスマルクにありては、

「ボナバルテイスムスでふものは、吾々普露西に於ては、余をして主張せしむるならば、實にむしろボナパルトよりは古く在るものである。唯それが一層に穩なる、獨逸的な形態に於て存したものである。」(フランクフルト一八五一年十二月二十五日。ゲルラハ宛ビスマルク書簡)(『ゲルラハとビスマルクとの文通』頁二二(27))

である。それが自由主義或は革命原理の排斥を包含することは、既述の如くであつたとは謂へ、必しも所謂自由統一の思想、即ち彼がこれに於てもその高潮時に思想感化をうけたであらうものゝ、全部を殘る處なく、少くも一八五〇年代に於て、放棄し盡し居たりとは考へられない。

「新獨逸の基礎立て、及び建設は、ビスマルクにとりては、一八四八年の特有の精神に對する、鬭争となつた。」(レンツ『小史論文集』卷第二、頁三四五(28))

と見るべきか否か。吾々は一層に、若きビスマルク、想像構圖多かりしビスマルクを、見るべきか否か。特有精神に對する鬭争ではなくして、特有精神の感化或は遺影と、現實の事態それは彼れのフランクフルト時代聖ペテルスブルク時代そしてバリ時代を通じて、次第に彼れの眼前に、その政治生涯の經驗に、現出し來つたものとの間の、彼自身に於ける鬭争ではなかつたか否か。爰に後年の、彼れの國民自由黨との關係、彼れの一般普通選舉法、また彼れの對猶太問題の、過去の系線を求むるの必要はあるまい。

伊太利戰役は、そしてその前後の形勢は、ビスマルクに少からざる興奮と、「混亂」を齎したものと考へられる。何が故の興奮であつたかは、如上の考察に基いて考へられる。伊太利戰役に際して普露西の採るべき政策に關する彼れの主張に就いては、既に世に能く知られてゐる。その「嚴正なる中立維持」は、決して單にそれが普露西の「利益」、即ち彼の言明するところのものゝ上の、理由に沿ふてのみ見るべきものでなく、また親佛蘭西策は、獨り「奥太利に對する正面攻勢」(ミテルスステット『一八五九年戰役』頁一八(29))でもなく、亦如上の考察に據るべきところが甚多い。ヴィラフランカ和約を口惜しく思つたのは、カヴールのみでなく、「獨逸のカヴール」も同様であつたらう。謂ふまでもなく、それは單に「反感」にのみ基くもの、或は小獨逸論的現實主義の打算にのみ出づるものでもなく、アダ

ム・スミスを読み、リカルド、コント、コンスタン、ルソーに學び、シャトオブリアンに耽讀したる伊太利のカヴールの失望と、一脈相通するものがあつたと思ふことが、適當である。されば爰に、後年の彼れの文化評論が考へられる。

巴里に於けるナポレオン三世の「卒直」と、ビスマルクの「沈黙」とも、所謂ビスマルクのナポレオン政策に對する搜出（ゾンデールング）のみを以つては、形容し得ない事實であり、當時の彼れの當惑に就いては、マテルが能く形容してゐる（マテル前掲同書。卷第一、頁五〇七以下（30）。）とにかくそれが當惑であつたことが注意される。かくて一八五八年の彼れの「同格」と「行動の自由」との、普露西政策に關する言明（『ビスマルク全集』卷第二、頁三〇二以下（31））が、明確なる信念としての彼れの就任時に至るまでの、一八五〇年代に於ける彼れの思想は、ユンカアの遺影と、四八年の感化影響と、高潮の思想環境との間に、躍動し、變轉し、迂回したるものあることが考へられる。一八六二年彼の就任の歳十月十日、彼はフリードリヒ・ボイストに書簡を寄せて曰く、

「余は貴下の世事に通することに鑑みて、何等證言するの要を認めないが、大方の政治的稚兒や、新聞に於ける余の反對者等が、語るが如きあらゆる冒險的な方策からは、余は正に遠ざかつてゐるものである。余が時折に表面的に言つたことの、不眞實な、歪められた、またまごまりなく作られた言明なるものから、世人は余の批判力までも、疑問に置かうとする傾きがある。然し貴下は、事の眞實な意味の完全な了解に立つて、それを認めてくれてゐるであらう。余は決して、普露西をかのサルヂニ

ヤの政策の軌道の上に推し付けるべき職責を、感じてゐるものではない。そして萬一何人かゞ、今の余の状態位置に於て、斯う云ふ風に感ずることがあつたとしたら、それは唯、理論を現實にすることのために、總ての政策の根據を失つて終ふであらう。」(ボイスト『四分世紀の三つより』卷第一、頁三〇六、三〇七(32))

冒險的な或はこれに類する方策の否定に至るまで、そしてサルヂニヤ的政策の軌道を全く棄却するに至るまで、理論から現實への過程は、一八五〇年代に於て、ビスマルクにも存在したものと考へ得られる。しかもボイストも、亦その後の事態の思出に於てこの書簡の「特異なる感銘」を記してゐるのである(クリム戰役時代を顧み、二州問題に照し、更に一層伊太利戰役に就いて記述すべかりしものは、頁數と史淵記念號たるためこの故に由つて、多く省略に従つた。参照文献には、重要な原語文を附記するに努めた⁴⁾)

- 1) J. Cohen, *Études sur l'empire d'Allemagne*. Par. 1879. p. 45. ('elle intrigua fortement à Berlin pour le faire rappeler de St.-Petersbourg.— cf. L. Bamberger, *M. de Bismarck*. p. 37.)
- 2) J. Bainville, *Bismarck*. Par. 1932. p. 32. "envoyé à l'ambassade de Pétersbourg, pres-que en exil."
- 3) *Aus Bismarcks politischem Briefwechsel*. Berl. 1893. p. 104. 105.
- 4) *Briefe des Generals Leopold von Gerlach an Otto von Bismarck*. Hsg. v. H. Kohler. Stutt. 1912. pp. 229, 230.
"Nach dem Gespräch — war es mir besonders betrubt, dass Sie sich durch Ihre Erbitterung gegen Oestreich von der einfachen Stellung

zum Recht und zur Revolution hatten abbringen lassen. Die Grundsätze der heiligen Allianz—weder schwärmerisch noch unpractisch.—vielmehr die allein practischen. "Die Nation" gewinnt man durch Thaten, aber nicht durch Liberalism."

5) P. Mather, Bismarck et son temps. Par. 1912, tome 1, p. 462. "C'était le rôle d'une machine à écrire; il laissait l'esprit libre."

6) Fr. Beiche, Bismarck und Italien. Ein Beitrag zur Vorgeschichte des Krieges 1866. (Histor. Studien. 208) p. 18 ff.

7) Otto von Bismarck, Gedanken und Erinnerungen. Stutt. 1898. Bd. 1. pp. 227—229.

8) Fürst Bismarcks Briefe an seine Braut und Gattin. hrsg. v. H. Bismarck. Berl. 1931. pp. 367, 369. "comme un chien dans un jeu de quilles." "alle amtliche Beziehungen sind im Vergleich zu Frankfurt aus Dornen zu Rosen geworden."

9) Ottokar Lorentz, Staatsmänner und Geschichtschreiber des 19. Jahrhunderts. Berl. 1896. p. 157. (Der Gen.-Adjutant L. v. Ger-

lach. Erster Theil d. Denkwürdigkeiten.)

10) Ulrich von Hassell, Cavour und Bismarck. 2. Aufl. Lpz. 1937. 19 p. (Kaizer Wilhelm-Inst. f. Kunst u. Kulturwissenschaft, Vorträge, Hft. 1) p. 9. "durchaus Mittel zum Zweck."

11) Arnold Oskar Meyer, Bismarcks Kampf mit Oesterreich, 1851—59. Berl. 1927. p. 425 "Dieser Trumpf lag nicht im Schosse der Bundesversammlung.—Dieser Trumpf hiess Frankreich."

12) O. Lorenz, op. cit. pp. 189, 190. "Gegen einige positive Beschuldigungen wird das preussische Gouvernement gerechtfertigt."

13) A. O. Meyer, op. cit. p. 304.

14) Otto von Bismarck, Die gesammelten Werke. Bd. I. pp. 285, 285.

15) *ibid.* p. 285. Briefwechsel d. Gen. L. v. Gerlach mit O. v. Bismarck. 2. Aufl. Berl. 1893. p. 63.

16) *ibid.* Bd. II. p. 44. (Schreiben an Min. v. Mantouffel.) "Träge, unfähig und gewissenlos; anscheinend gütthüthig, aber grade falsch ge-

- nug,— Diese Seiden des Präsidiums, etc.”
- 17) Briefe d. Gen. L. v. Gerlach. pp. 29, 34.
- 18) O. Lorenz, op. cit. p. 191. “Welch ein Zwiespalt im eigenen Lager! Doch lassen wir Bismarck, der übrigens erbornlich aussieht und sehr wenig gesund ist.—In welcher Confusion befinden wir uns.”
- 19) *ibid.* p. 192.
- 20) Bismarck, Die ges. W. Bd. X. p. 109. “es würde nichts bleiben als das rote Unterfutter dieses sehr leichten Kleidungsstückes.”
- 21) Fürst Bismarcks Reden, hrgg. v. Philipp Stein. Lpz. Reclam, Univ. Bibl. 3338—40 Bd. I. p. 180. “wohl aber seit zwei Jahren die Farben des Auftrubs und der Barrikaden!”
- 22) Chester Wells Clark, Franz Joseph and Bismarck. The diplomacy of Austria before the war of 1866. (Harvard Histor. Studies) Cambridge, 1934. p. 125.
- 23) Ged. u. Erinnerungen. Bd. I. p. 175.
- 24) Bismarck, Die ges. Werke. Bd. I. p. 17. Privatschreiben an Min. v. Mantouffel (51,
- VI. 29) “auf eine organische Entwicklung deutscher Politik in ihm aber zu verzichten.— innerhalb des uns durch die Natur angewiesenen geographischen Gebietes.”
- 25) Briefwechsel. pp. 117—121
- 26) Gedanken und Erinnerungen. I. 156. “eine täuschende Zauberformel!”
- 27) Briefwechsel. p. 12. “älter als Bonaparte, nur in milderer deutscher Form.”
- 28) Max Lenz, Kleine historische Schriften. Mün. 1920. Bd. II. p. 345.
- 29) Annie Mittelstaedt, Der Krieg von 1859. Bismarck und die öffentliche Meinung in Deutschland. Stutt. 1904. p. 18.
- 30) Paul Matter, op. cit. pp. 507 ff.
- 31) Bismarck, Die gesam. Werke. Bd. II. p. 302 ff.
- 32) Friedrich Ferdinand Graf von Beust, Aus drei Viertel-Jahrhunderten. Bd. I. pp. 306, 307. “dass ich allen abenteuerlichen Plänen fernstehe.—Ich fühle nicht den Beruf, Preussen in d. Bahnen sardin. Politik zu drängen.”